



六花 11

俳句雑誌りつか
2018 (平成30年)
cover design ichigo

卵産むごとくつぼみをシクラメン
秋耕の土にしたがふ男かな
小野の野ののちのいさよひのほりけり
初時雨そば屋に一人をみな客
二人して新そば五皿追加かな
初しぐれ白磁のごとき鯉の背_ナ
山水を引く濠端の草もみぢ
薄紅葉うしろ姿の女傘
霧立つと城山跡を仰ぎけり
唐辛子飾ると富山弁の人
自然薯の残り蕎麦湯をすすりけり
蕎麦湯来てしばらく塗を賞でにけり



初時雨出石白磁をそば皿に
新そばを啜る老舗や五万石
銃眼に顔入れてみし初紅葉
霜降の芝踏むお城山跡に
濠に湧く秋水に鯉優雅なる
城山へ赤く時雨るる稻荷かな
覗き込む人に澄みけり鯉の国
辰太鼓聴きのがしたる時雨かな
銃眼に顔入れてみし薄もみぢ
子持鮎いただき一粒万倍日

『日本語のルーツは古代朝鮮語だった』
に、万葉集の彼らの歌に使われた所有格助詞「の」の表記を丹念に調べてみると、ここには漢字の中音を借りた表記「能」がひとつも使われていないのに気づく。すべてが漢文助詞の「之」または「乃」になっている。家持などの慶尚道方言（伽耶・新羅方言）の使い手は慶尚道方言独特の所有格助詞「が」（例：君が代、我が世）を使うのに対して、人麻呂はいかなる場合でも「が」という所有格助詞は使っていない。このような所有格助詞の使い方の違いから、人麻呂や高市黒人など百濟方言（忠清道・全羅道方言）を使う人々、すなわち百濟遺民であったことを知ることができる。と朴炳植氏の説。ほかに、人麻呂は一人ではなく柿本一族の集団だったという説も。人麻呂の歌には一部虚構もあるのではないかと思う。折口信夫は「文学に於ける虚構で、「寧ろ芸術は嘘で成り立っている。その肝心の部分は嘘だと言っている。だから昔の人は芸術には信頼せず、作家にしても、戯作などと自分自身を軽蔑していた。今言われている虚構ということも、この態度の延長に過ぎない。しかし、広い意味で言えば、芸術家のする事に、虚構が一つも入らぬことはない」と。

次は「芭蕉、遊女のうそ」

ふるさとの赤間石の硯洗ひけり
母さんと弟に呼ばせ赤まんま
香水に母の耳たぶ透けにけり
時鳥草南にまだらの際立てり
羽織るもの丸にうながす星月夜
大橋のうごめく闇や星流る
中天に夫逝きし日の夏の月
炎天の半ばにのぞく万歩計
ほつれ毛のうなじにからむ暑さかな
秋夕焼娘の連れ合ひを見舞ひをり

高華抄

蟬に穴

佐津のぼる

真つ暗であれども覗く蟬の穴
手花火を囲む八つの膝小僧
庭に残れる手花火のほひかな
はて誰だつけ帰省子に深き辞儀
掃苔や水だだ洩れの撥ね釣瓶
墓洗ふ孝子ひとりも出ぬ家系
炎天へ勝利の拳突き上げぬ
敗者にも惜しまぬ拍手夏逝けり
蜜豆や妻に告げざる血糖値
街路樹の梢のさわげる風は秋

青空に溺るる小さき水着かな

住田千代子

あおぞらにおぼるるちさきみずぎかな すみだちよこ

名を知らず火の蟬の木と名付けたり

騒ぐ子に蟬一瞬の閑けさよ

育空に溺るる小さき水着かな

拌みゐる姿に掃かれ蟬の殻

わが庭に蟬の生涯ありにけり

女児の水着か女性の水着かが干されている
現場で、近年は女性の水着もかなり
小さく大胆になっている。水着で水に溺
れるのは当たり前だが、そうでなく、真つ
青な夏空が海に思えてきたのであろう。
青空に干されて、ひらひらと揺れている
水着が「溺れている」と、驚いて言いと
めた独創的で印象鮮明な句。千代子は句
集を準備しているうちに急速に自在さと
独創性が生まれてきた。

雪卿集 せつけいしゆう

永田万年青

志方 章子

譲られし席に香水匂ひ立つ
盛り場の同じ香水すれちがふ
願ひ込め胡瓜の馬を加へけり
お供への夕張メロン久しぶり
口覆ひ小粒のトマト噛みにけり
西瓜買ふ叩ける音の弾けぬて
眩しかりいつも寄添ふさくらんぼ
揺らしては口に含みぬさくらんぼ

平成の世を生き抜きて涼しかり
白き花に白き蝶きて紛らはし
雲の峰何やら力湧いてきし
香水に頼る齢となりにけり
香水やいつもと違ふ我のをり
胡瓜もみ苦手や主婦の一年生
サイダーの泡吹く平成あとすこし
一握り足せば麦茶の吹きこぼる

藤生不二男

出口 誠

何処までも汗の
大空ありにけり
桑の実や暮れゆく母の
背負籠
香水の母を疎みし日の
ありぬ
露の葉に砂の湧き水掬ひ
けり
合歡の花遠き落城ありに
けり
わが影の土塀を越ゆる夜
の秋
新涼のぬた場に風の通ひ
けり
みんなの戸袋に鳴く秋暑
かな

なつかしき名前のそろふ
盆休み
盆休みゲームの次ぎは
テレビかよ
線香で親指やけど盆休
み
クーラーを我慢してゐる
残暑かな
残暑かな窓といふ窓開け
放ち
台風の通過前夜よ今の
風
水分を補給してゐる残暑
かな
提灯の風に揺れゐる地藏
盆

升田ヤス子

揚花火きはまれば暈かかりけり
暁闇にふはふはと白さるすべり
裏年の青柚子一つもぎにけり
母の手記見つけし盆の用意かな
盆道を刈る人に夜の明け初めぬ
梅花藻のひとつは水を抜きん出づ
卓を拭く子らの去りたる夏座敷
鼠花火怖がることが楽しかり



雪樹集

住田千代子

平居 滯子

名を知らず火の蟬の木と名付けたり

浪浪と古墳を巡る竹落葉

騒ぐ子に蟬一瞬の閑けさよ

御陵の竹伐りに出る小舟かな

青空に溺るる小さき水着かな

秋立つ日姉より先に嫁ぎけり

拝みぬる姿に掃かれ蟬の殻

十階に蝶訪ひ来たる今朝の秋

わが庭に蟬の生涯ありにけり

タカラジエンヌも独居よ秋立つ日

塩飴をふふみ合ひぬる晩夏かな

鈴虫や眠れぬ夜の三重奏

谷口 一献

田尻 勝子

正直に言へば香水きつすぎる

麦茶沸く地下のマグマの煮えたぎる

見るだけの阿呆で終へし踊りかな

乞食の縁に据りて麦茶汲む

捉へどころのなき女性かな秋の蝶

平成や老いの二人に蟬取らる

慎ましく歴史の狭間紙魚走る

廃校の時計は正午桃たわわ

盆休み身の置きどころなく欠伸

百回目の甲子園なり西瓜切る

湯に入らず仕舞八月了りけり

香水の三十年で尽きにけり

廣畑 育子

赤松有馬守破天龍正義

月光の射し来る方を仰ぎけり

無月かな門灯頼りに近回り

角川の光軒端に夕端居

波音に聴こえて来たる茶立虫

桐の木の挽かれて久し秋涼し

茶立虫赤貧の我慰めよ

秋立つや妹の病ひを耳にして

独り寝を癒してくれる茶立虫

更けつつも火照つてをりぬ夏の月

秋出水鷺は忽ち向かふ岸

南窓花火の匂ひ這ひ入りぬ

桃ちゃんの傷つき易さ危うさよ

六花集



十一月到着順

大内 幸子

何処からか一群となる赤蜻蛉
窓からの風はまさしく今朝の秋
揺れ通す芋の葉ぴたつと止まる午後
秋立ちて部屋の短冊書き替へる
精霊舟今年も編めて今年もと

延川 笙子

信号を境に秋の雷雨かな
秋植の苗十株のバイク便
山肌を剝りて野分過ぎゆけり
山崩れ迂回の道の萩の花
墓守りの絶えぬ桔梗の花咲いて

蜚雪譚 山田六甲

十一月作品から

冷泉 花

真桑瓜そばに私は絵のモデル

育子の肖像画を観て私も描いてほしいと紹介してもらい絵のモデルになつたという。その脇に甜瓜を置いて、季節感も取り入れるのだ。花さんのような美しい人をモデルに絵を描けるのなら夢のようだ、と画家が言ったかどうかは知らない。

菊谷 潔

蝉しぐれ遠くなりゆく夕べかな

物や物事、風景が遠くなる感覚を主宰もよく味わうことがある。遠い、遠くなるにはそういう感覚が生れてくるのだろうか。

中村草田男も句は忘れたが、何か遠く感じるといふ句をたしか詠んでいたと思う。

遠くは視覚的に感覚的にとらえどころのない距離をはらんでいると思う。遠い、ということはこの句を通して、もう一度思索してみるのもいいのではないか、と気づかされる。

北村ちえ子

袋にはシマシマスイカ橋渡る

シマシマスイカが面白い表現。縞模様のはつきりとした西瓜だろう。こういう西瓜は甘く美味しいことを知っている。その重い西瓜を抱えて橋を渡っているというシチュエーションも面白い。